



白壁が語る港ものがたり

波の音をたどり、また港へ。もう太陽は西へ傾いている。暗くなる寸前の空にぼんやりと浮かぶ白壁。学校帰りの小学生の赤いランドセル。蒼く瞬く一番星。波の音だけが、いつまでも響いていた。

路地から路地へと歩いていたら、商店の連なる通りへ出た。この通りでは、毎月、第三日曜日に「まつちや朝市」が開催される。「まつちや」とは松合の愛称。土蔵の港町、松合のよさを知つてもらおうと始まった朝市だ。採りたての野菜、果物、そして新鮮な魚。周辺の市町村はもちろん、熊本市からも多くの人々が訪れ、かつての賑わいを見せる。

北に山、南に不知火海を抱く不知火町松合。昼下がりの港。おだやかな陽射しを投げ掛ける冬の太陽、潮の匂い、小船の軋む音。水面に映った土蔵の影が、ユラリユラリとかげろうのように揺れる。一つ目の角を曲がると、普通の家に混じって、あちこちから土蔵の白壁が顔を出す。

藩政時代、松合は藩内唯一の港として栄えた。魚介類、麦、米、大豆。あらゆる物資が松合に陸揚げされ、廻船問屋によって肥後一円に送られていった。いったん陸揚げされた穀類は、ここで酒、醤油、味噌などに姿を変える。

明治三十年ごろに最盛期を迎えた松合だが、陸上交通が発達していく中、交通拠点としての重要さはしだいに薄れていった。

しかし、白壁の土蔵は今も当時の面影そのままに残っている。その数、六十基。白壁は色褪せたとはいえ、冬の陽光を反射して眩しくらいだ。

かつて、潮の具合を見たといわれる「潮見坂」を登る。いつのまにか狭い路地に入り込んでいた。過去、松合は何度も大火に見舞われた。蔵と蔵の間には細い火除道が、細く迷路のように入り組んで走っている。

不知火海に面する不知火町松合地区には、昔ながらの白壁の土蔵が多く残っている。毎月第三日曜日には「まつちや朝市」が開かれ、多くの人々で賑わう。また、海岸線からば、毎年旧暦の八月一日の夜、不知火海の沖合に不思議な火影「不知火」が見られる。